街を皆で“nijiiro”に
その種を届けるニュースレター

# にじのたね

にじいろ協働事業 2019

総集編 OMNI BUS

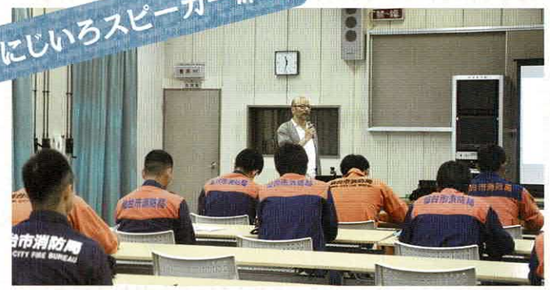
## 多様な性とともに「にじいろのまちづくり」

にじいろ協働事業は、仙台市と市民団体・東北HIVコミュニケーションズが協働で進め、2018、2019年度の2年間実施された事業です。4つの取組みを通して「多様な性のあり方」について分かりやすく伝えながら、行政や地域、市民の一人ひとりが自分ごととととらえられることを目指しました。

CONTENTS


●にじいろ協働事業リーダーインタビュー
●にじいろ協働事業参加者インタビュー
●ともに育つ・ともに生きる① 多様な性と学校・社会
●ともに育つ・ともに生きる② ゲイカップルの暮らし
●ともに育つ・ともに生きる③ トランスジェンダー夫婦の暮らし
●にじいろ協働事業が伝えてきた「多様な性」
●マンガで知ろう「LGBTってたとえばどんな人のことなの？」


### にじいろスピーカー派遣

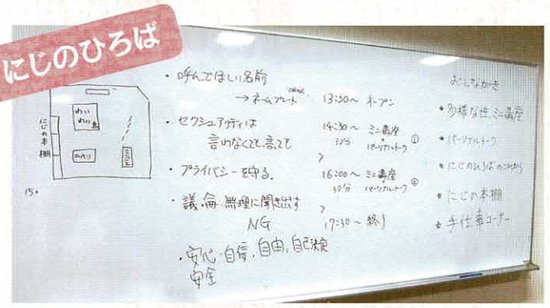


仙台市の各部局、学校などに講習や研修を提供しました。目標回数は達成できませんでしたが、「学ぶ必要がある」と伝えられたことが成果です。また、興味のなかった人、性的マイノリティの存在を知らなかった人にも伝えることができ、“はじめの一歩”を踏み出して頂けた人が多かったという点でも意義深い活動でした。

### せんだいレインボーday

1年目560名、2年目は800名を超える来場者数、ボランティアも1年目約30名、2年目は約60名が参加し、当事者も当事者以外も、多様な人々がたくさん集まってくれました。また、「男女共同参画せんだいフォーラム」にも2年間参加。シンポジウムと映画上映を行い、こちらにもボランティアが参加してくれました。

### にじのひろば



当事者も性的マイノリティについて知りたい人も自由に入りできる場所として、様々な人が訪れました。成果は見えにくいですが、相談につながったり、イベントにボランティアとして参加してもらったり、様々な窓口にもなりました。SNSで見つけてきてくれた人が多く、ファーストコンタクトのためになくてはならない場でした。

### にじのたね

仙台市内の公共施設などに設置し、1年目は主に基礎知識、2年目は当事者やボランティアの声を発信。HPや仙台市のサイトにもPDF版を掲載しました。好評を得て、総集編の制作も行われることになりました。他にもボランティアがツイッター、インスタグラムで情報発信。多彩な情報が審査会でも高く評価されました。

# にじいろ協働事業 リーダー・小浜さんインタビュー

「多様な性を含めて多様性を認める社会にするためには、ひとつひとつ丁寧にやることが大切だと改めて感じた2年間でした。来年度からが本当のスタートです。孤立を無くすため、これからもじわじわと広がっていきたい。」

## 震災時に何もできなかった体験が原動力

**オオギ：**「にじのたね」編集部のオオギです。全く予備知識なくスタートし、理解したと思うとまた自分の中の無意識の偏見に気付くという繰り返しの２年間でした。やっと少し理解を深めることができたと感じています。
多様な性のあり方に対して社会の理解が進んでいない中、どのような経緯でにじいろ協働事業立ち上げに至ったかを教えて下さい。

**小浜：**性的マイノリティの困難について、当事者の相談に乗ったり自治体に政策提言したりする活動を長年続けていましたが、決定的な原動力となったのは震災時に何もできなかったという体験でした。コミュニティが弱く、被災している仲間がどこにいるのかも分からない、どうやって支え合えるのかも分からない、雲をつかむような状態でした。社会とのつながりが必要と痛感し、教訓を踏まえた取組みについて行政と考えようと思いました。

2016年の男女共同参画せんだいプランには啓発、教育、相談などについて入れてもらえましたが、仙台市としても具体的にどうしたら良いか悩んでいたという状況でした。そこで、2017年に市民協働事業提案制度に申請。「まずは一緒にやってみよう」というスタートでした。

## 誰にどう伝え、広がっていくかを想定・設計

**オオギ：**４つの事業はどのように設計されたのでしょうか。

**小浜：**自治体、市民、当事者の３つをつなげるために総合的な事業が必要と考えました。仙台市との“協働”ですが、部署と部署の協働、市民と当事者との協働など、様々な広がりを想定し、皆が集まって自分の地域や活動場所に持ち帰ることができる設計にしました。ボランティアチーム「にじいろキャンバスSENDAI」が中心となり２年間活動しました。（４つの事業は表紙を参照）

## 多様なボランティアのおかげで大きく広がった

**小浜：**にじいろ協働事業がこんなにも幅広くなったのは、何よりも主体的に関わってくれたボランティアのおかげ。すべてのものを皆と試行錯誤しながら作り上げつつ、任せられることはお任せしました。

**オオギ：**ボランティアは中高生や大学生、社会人やシニアまで世代も幅広く、本当に多様でした。このように多くの人が関われた理由は何でしょうか。

**小浜：**それまで行ってきた講演やつながりづくりなど、当事者の地道な活動が当事者だけでなくアライ※1とつながるきっかけとなりました。１年目はそのつながりで集まった人が多かったのですが、２年目はそれまで会ったことがない方もたくさん関わってくれました。また、仙台市の事業ということで、安心して関われた側面もあったかもしれません。多様であることが前提の場は意見も出しやすく、皆が当事者意識を持って考えられたことが大きいと思います。

「にじいろキャンバスSENDAI」は、今後も「にじいろCANVAS」として活動を続けることになりました。自分たちで資金を集めて行う活動になることで自由度が増し、より幅広い人との関わりが生まれるかもしれません。

「にじいろスピーカー派遣」や「にじのひろば」など、仙台市として続けて欲しい取り組みもあります。流れが止まることなく続いてくれることを期待しています。

## にじいろ協働事業が描く「にじいろのまち仙台」

**オオギ：**「多様な性のあり方」が理解されることで、まちは豊かに、伸びやかになっていくと想像しています。

**小浜：**性の多様性を前提として集う「にじのひろば」のあり方が、まち全体に広がることが理想だと思っています。“異性愛とシスジェンダー※2”は一つのあり方でしかなく、“標準”はない。どんな人も、もともと多様な存在なのだということを一人ひとりが考えていけるようになりたい。簡単なことではなく、道のりは長いですが、「違って当たり前。だからコミュニケーションしましょう」ということを、あきらめず皆で呼びかけ続けていきたいと感じています。

※1 アライ／性的マイノリティを理解し、共に行動しようとしていく人たち
※2 シスジェンダー／生まれたときに診断された身体的性別と自分の性自認が一致し、それに従って生きる人

東北HIVコミュニケーションズ、市民有志、仙台市のメンバーで構成されたボランティアチーム。4つの事業を通し、「にじいろのまちづくり」を目指して活動しました。

左からゆきさん、わかなさん、まひろさん、かなえさん。にじいろ協働事業スタートの時から親子で参加してきました

## ちゃんと知ることで“違い”を越えたい

自分達の学校の制服のあり方について見直したことをきっかけに、多様な性について正しく知ろうと思ったという高校生のわかなさんとまひろさん。にじいろ協働事業には 2018年からそれぞれ親子で参加しています。

「性別に関わらず服装を自分で選択できることは大切だと思いましたが、多様な性について知らない人からは否定的な意見もたくさん出ました。」（わかなさん）

にじいろ協働事業で活動したことで「こんな困りごともあるんだ」という気付きが次々と出てきて、伝えたい気持ちが強まったと言います。また、高校生と大人、ストレート※1と性的マイノリティ※2などの“違い”を意識することに、より疑問を感じるようになったそうです。

「“高校生とは”“性的マイノリティの人とは”という、誰もが知らず知らずのうちに持ってしまっている固定概念を改めて感じる機会にもなりました。職業や年齢、セクシュアリティ※3など関係なく、個人を見てもらえる社会になると良いなと思っています。」（まひろさん）

「帽子はピンク、ランドセルは赤など、私たちは小さなころからバイアス※4をかけられて育っています。そのことでセクシュアリティに悩む人への配慮ができていなかったのではないかと感じる場面はたくさんありました。違いにとらわれず、丸ごと受け入れ合って、皆で楽しいことをしたいですね。」（わかなさん）

## いつの間にか自分ごとに。皆がありのままになれる

「皆で一緒にやっているという気持ちが１年目よりも強くなっています。“自分も多様な性の当事者”というスタートの時にはなかった気持ちが今はあります。」（ゆきさん）

「振り返ると、困りごとを知ったら何ができるだろうとか、尊大な態度が少なからずあったと思います。」（かなえさん）

柔軟な子ども達の姿に刺激を受けたり、自分の中にもあった生きづらさとセクシュアリティで悩む人の姿が重なったりするうちに、知らず知らず自分ごとになっていったとおふたりは話します。

「気が付いたら、自分も自分らしくいていいと思えるようになっていました。」（かなえさん）

「理解するしないでなく、実行委員会の皆と一緒に楽しめた時間が大切に感じられました。」（ゆきさん）

2年目はボランティアとして全力で楽しんだというまつもとさん

## 直接触れ合うことで楽しくなっていった

仙台市職員でもあるまつもとさん。性的マイノリティに関する事業の担当を任された時、プライベートでも当事者の方々の集まりに参加したことで、仕事を越えて楽しみになっていったそうです。

「イベントなど様々な活動を共に重ね、予想以上に皆さんと親しくなり、気持ちも解放されていきました。知識が無かったことがかえって良かったと思います。初めて知ったり、一緒に考えたりすることで自然と関係も出来た気がします。」

今年は個人的にボランティアに参加し、せんだいレインボーDayでも実行委員として活躍しました。

「皆さんから“まちを変えたい”という想いを感じ、そこに賛同しています。当事者、非当事者という境も意識しなくなり、今はこの絆を大事にしたいと思っています。」

尚絅学院中学高等学校合唱部と共演した清貴さん

せんだいレインボーDay スペシャルゲスト

## 「優しいまちづくり」を仙台発信で東北全体に

ゲイであることをカミングアウトしている仙台出身のアーティスト清貴さん。せんだいレインボーDayでは昨年に引き続き歌声を披露し、仙台への思いを語ってくれました。

「みんな同じ人間である事を思い出し、一人一人が優しい気持ちになる事で、笑顔の輪が広がっていくと思います。仙台がマイノリティの人たちに対して優しいまちになる事で、東北全体に発信できると思います。仙台出身者としてそうなる事を期待します。」

※1 ストレート／異性愛者。性的多数派を表現する言葉。
※2 性的マイノリティ／性のあり方が一般的なものと異なる人。少数派。
※3 セクシュアリティ／性のあり方。
※4 バイアス／さまざまな偏り。先入観や偏見。

せんだいレインボーDay
ボランティア

従業員の皆さんと一緒にせんだいレインボーDayでコーヒーを提供したかくたさん（中央右）

せんだいレインボーDay
ボランティア

せんだいレインボーDayでは「まちかど保健室」で当事者の話を聞きました

## 従業員のキャパの広さを知ることができた

仙台で飲食店を営むかくたさん。性的マイノリティの研修を実施したことをきっかけに当事者を採用した際、従業員が自然に受入れる姿に自社の良さを再確認できたそう。

「自己紹介からカミングアウト（P７参照）できる雰囲気でした。隠しごとがなく、風通しが良い組織であることを確認でき、本当にうれしい出来事でした。」

せんだいレインボーDayに参加した従業員からは「自社の取組みのことを来場者に伝えたらありがとうと言われ、自分の会社は感謝される存在なのだと感じた」という声も。２日間参加しながら当事者と触れ合ったり、イベントで知らなかった事実や新しい価値観を知ったりと、皆さんにとって貴重な体験になったようです。

「一緒に働こうよとフランクに言える社風は、我々の誇りなのだということを改めて感じることができました。」

## 教育現場の連携や意識統一の役に立ちたい

宮城学院女子大学の「にじいろプロジェクト」は養護教諭や保健体育教員を目指す方々が活動。せんだいレインボーDayでは“多様性を受け入れる学校”“皆が過ごしやすい学校”について参加者と一緒に考えたいと思い、ブースを作りました。

「イベント前日は実行委員の方々が練習相手になって下さり、様々なアドバイスをしてくれました。おかげで当日は自信を持って来場者に声をかけることができました。」

現在はこのようなチャンスを大切に“知ること”から始め、できることは何かを模索中です。

「大学生は子ども達の気持ちも、大人の気持ちも両方考えられる存在です。自分達が現場に入る時は性の多様性が浸透し始めていると思うので、学生の今だからこそできることを見つけて、将来のために学んでいきたいです。」

## にじいろ協働事業に参加したみなさんの「にじのこえ」

### せんだいレインボーDay来場者より

- あらゆる生き方、性、指向といったものが、特別なものではなく、あたりまえの世の中になるよう、自分自身が少しずつでも変わっていきたいです。
- 教育現場にいますが、性の多様性だけでなく様々な多様性が理解されず、本当の気持ちを言えない子たちがいると思います。生きづらさを抱えていることに気付いても、学校では受け入れ態勢ができていないことに歯がゆさを感じています。
- 沢山発信していって、個性を認めあえる、素敵な世の中になって欲しいと思います。
- 人を好きになるって、素晴らしいことですよね。たとえどんなかたちでも、いがみ合うよりずっといいと感じました。

### せんだいレインボーDayトークセッションより

- いろんな人がいる場は心地いい。様々な個性の人が集い、楽しめる場を作りたいです。
- 人生楽しいはずなのにそう思えない社会ってどうなのだろうと感じます。本当に楽しいと思えるきっかけ作りをしたい。
- 誰も置きざりにしない社会が大事だけど、制度の中では守られない人がどうしても出てしまう。ゆるく繋がって、各個人が健やかに生きていける方法を皆で考えていきたいです。
- 良い社会になっていくために、10代、20代の意見を皆で共有し合える場がどんどん増えていけば良いのではないかと思います。
- 差別は生きる力を奪ってしまう。どんな人も差別する側になってしまう可能性があることを忘れないでいて欲しいと願います。

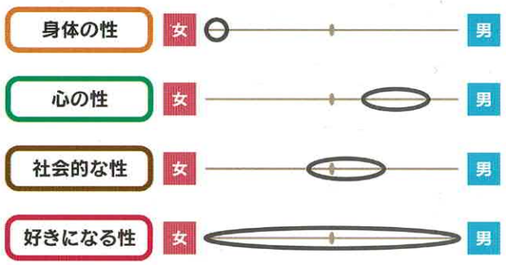
### にじのひろば参加者より

- 何もしない空間で語り合える「にじのひろば」は、意義のある場だと感じました。初めて会った人同士で互いの違う世界が見れることが新鮮でした。
- にじいろ協働事業の中で多くのチャンスを頂き、チャレンジができました。「にじのひろば」を通して新しいつながりができたことも嬉しいことでした。
- 「にじのひろば」をきっかけに性的マイノリティの活動に戻ることができました。それまでの自分の経験が役に立つ場面もあり嬉しく感じました。



にじのひろば
スタッフ

１年間スタッフを務めた大学生のしんやさん




しんやさんの感じている性のあり方を表したもの。性的マイノリティではない人も、性のあり方をこのグラフを使って表すことができます

## それぞれの性のあり方を話し合えた貴重な場

性的マイノリティの居場所づくりに関わった経験もあるしんやさん。にじいろ協働事業に関わるようになったのは、１年目に「せんだいレインボーDAY」のボランティアとして参加したのが始まりです。２年目はリーダーの小浜さんが声をかけたことがきっかけで「にじのひろば」のスタッフとしても活動し、たくさんの出会いがあったそうです。

「性的マイノリティの仲間とは、自分から動かなければなかなか出会えないという現実があるので、新しい出会いを求めてお受けしました。ありのままに近い自分でいられる場所だと感じられ、自分の居場所になれば良いなという期待も叶えられたと思っています。訪れる人それぞれの性について聞くことができ、多くのことを学ばせていただけた大切な場でした。」

「にじのひろば」ではご自身のライフヒストリーを披露してくれました。

## しんやさんのライフヒストリー

### 生まれながらに割り当てられた性別への違和感

自分に割り当てられた性に対して違和感を持ち始めたのは思春期の頃でした。家族の転勤で移動が多かったため、アイデンティティが定まりにくく、はっきりとした時期は今もあいまいです。

感情移入が得意なので、何かにあこがれているだけではないかとか、何か特別なものになりたいと思っているのではないかなど、「思い込みのはずだ」と何度も思い直し、ずっと苦しんでいました。親が用意してくれた服を着ていないと疑問に思われるのではないかと不安で、着たくない服の中から目を閉じて無理に選んで着たりしていました。

周囲に望まれる自分を演じる日々が続き、本当の自分が分からなくなっていきました。徐々に親と一緒の空間では過ごせないと感じるようになり、中学卒業を機に親元を離れ全寮制の高校に入ることを決意しました。

### 毎日の生活を共にする仲間へのカミングアウト

女子寮での暮らしは不便も多く、皆に嘘をついているような気持ちを抱えたまま、親元を離れても自分を演じる生活は続きました。

やっと自分の思いを認めようと決心がついたのは高校２年の終わりごろでした。

確信を持つことができた理由は２つありました。ひとつは「嫌なことは断ればいい」「来たくない服は着なくていい」と気付き、服を捨てたり、髪を切ったりできたこと。無意識だったのですが、そんな普通のこともできなかったと気付きました。もうひとつは、５年以上もの間、寝ても覚めてもその違和感のことばかり考えていたということ。「朝起きたら変わっていて欲しい」と毎晩願ってきた日々を思い返し、変わりようのない自分の事実を、勇気を出して受け止めることにしたのです。

さらに僕は意を決し、仲間一人一人にカミングアウトするようになっていきました。

「もうわかっていた」「理解できない」など、反応はそれぞれでしたが、「どういうことなの」と質問してくれる人もいて皆それぞれに受け止めてくれました。中でも「分からないけど、しんやはしんや」というのが一番響いた言葉です。

また、カミングアウトして良かったことは、向こうもまたある種のカミングアウトをしてくれたことでした。ある人は自身の悩みを、ある人は自分の思いを、ある人は自身の障害を。一緒に暮らしてきた仲間でしたが、その時僕はその人々と再び出会えたと感じました。

### 僕らしく生きるために違いを大切にしたい

「俺とお前って共通点がまるでないよな」と言ってくれた人がいます。僕はその言葉をとてもうれしいと感じました。「そうだね」と言って笑い合えることが嬉しかったのです。同じだね、と言ってつながることも大切です。むしろ社会はそのようなつながりが大多数を占めています。けれど僕は、僕の目の前の人との違いを大切にしたいです。理解できなくても、嫌いであっても受け止めていきたいです。

できることならカミングアウトの必要がない社会が良いと思っているので、僕の体験を通してカミングアウトをすすめるわけではありません。また、男らしくありたいと思っているわけでもありません。僕らしく生きようと思って歩んできてたどり着いたのがこのような道でした。

僕はこれから新しい土地で社会人として働きますが、これからも違いを大切にしながら、今までの時間と人とのつながりを宝に、頑張っていきたいと思っています。

# ともに育つ・ともに生きる①「にじいろキャンバスSENDAIメンバーのにじのこえ」＋多様な性と学校・社会

## あゆみさん

大学生、LGBTの中高生の居場所HOMEY代表

**──大学入学まで、どのように過ごしていましたか**

幼い頃から自分が女性であることに違和感を感じていました。ネットや本で情報を集め、中学２年には性同一性障害と自覚。また、性のあり方を自分らしく表現しても幸せになれることも知り、あこがれも感じました。しかし、周囲に理解してくれる人が少なく、中学転校、フリースクール、別室登校高校中退、高卒資格を取って進学…と、紆余曲折がありました。まともな大人になるためには学校に行くことが必要と思っていて、スクールカウンセラーの先生やフリースクールでの出会いにも助けられながら、自分なりに決断して行動し、努力してきたと思っています。

**──HOMEYの活動について教えて下さい**

ネットで知り合った友人に会うために、高１の時に関東に行 きました。その行動がきっかけとなり、一緒に集まれる場が欲しいと思って立ち上げたのが HOMEY。SNSで呼びかけながら、毎回10名ほど集まり、４年間で30回を超えました。「一人じゃない」ということを伝えたくて続けています。

**──将来の夢や展望などを教えて下さい**

将来は性別適合手術も受けたいと思っていて、自分らしく穏やかな生活ができるようになれることが願い。今は建築について学んでいますが誰もが居心地の良さを感じる空間が作れるような仕事を探していきたいです。

## なかざわさん

大学生

**──どのようにセクシュアリティを受け入れましたか**

高校生の頃、異性にも同性にも恋愛感情を抱くことに気付いたのですが身近に偏見のある人が少なく、驚かれることはあっても否定されることなく過ごしてきました。自分自身も偏見がなく、自然と自分のセクシュアリティを受け入れていたと思います。

**──どのような過程でオープンするようになりましたか**

大学に入ると性を取巻く社会状況に疑問を持つようになりました。自分が性的マイノリティとして生きていくことに不安を感じ、葛藤を味わった時期もあります。しかし、身近に私のような人がいることを知ってもらおうと考えるようになり、３年生の時にフェイスブックでカミングアウトをしました。言葉やカテゴリーにこだわらず、私は私として生きていることを表現していけたらと思っています。

**──今後について考えていることを教えて下さい**

現在４年生ですが、暮らしを支える仕事をライフワークにしたいという思いがあり、医療系の仕事を目指して卒業後さらに専門学校で学ぶ予定です。「生きづらさがなく、皆がハッピーでいられる社会にしたい」というのが今の私のテーマで、宮城、そして東北が多様な性の人も生きやすい地域になって欲しいと感じています。将来は仙台に帰って仕事をしながら、自分に出来る活動をしていきたいと思っています。

## りをなさん

社会人

**──これまでどんな葛藤を感じてきましたか**

元々は女性性、男性性どちらも併せ持った自分を受け止めていました。男性らしくなろうと頑張ったり、女性になりたい気持ちに素直になったり、誰かの役に立つことで存在価値を見出そうとしたり……その時々のエネルギーで突っ走っていましたが、情熱もあり様々な活動に転換することも出来ていました。ぶつかりながら過ごしていたあの時代があったおかげで、今の自分があると思っています。

**──社会人になってどんな思いで過ごしていますか**

時には社会の反応や自分の揺らぎに押し戻されそうになることもありますが、想像以上に穏やかに過ごせています。誰かの役に立つことはもちろん、自分で自分の負の感情をデトックスできることや周りにプラスのオーラを与えられることに、より大きな歓びを感じています。

**──どんな大人になっていきたいですか**

ありのままの自分を表現して誰かがハッピーになってくれることはとてもうれしいし、自己満足で発信していることもキャッチしてくれる人がいて、本当に有難いと感じます。これからは何か一つ誇れることを見つけたい。評価を気にすることなく自分を表現できるような芯のある大人の女性になることが今の目標です。頑張っている人を勇気付ける存在になれるように、一層自分磨きをしていきたいと思います。

## しらとりさん

社会人、セクマイ・ダイバーシティ栗原代表

**──ご自身の活動でどんなことを伝えていますか**

セクシュアリティは性器や性行動だけが注目されがちですが、社会的、心理的な側面が広く含まれていることを伝えています。知らず知らず偏見の目で見たりしていることに気付いてもらいたいと思い活動しています。

**──活動をしようと思った理由を教えて下さい**

大学時代、イベントで当事者と知り合い、性的マイノリティへの差別に問題意識を持ちました。特に自分が育った栗原のような地方にはセクシュアリティを語る場がなく、情報が届いていないと気づいたことがきっかけです。また自分自身は発達障害の領向があって、子どもの頃生きづらさを感じていました。その経験がセクシュアリティで悩む子ども達の思いに通じるのではないかと思っています。性的少数者の方々を取り巻く問題について理解を広めることで、多様な価値感や生き方を尊重できる土台を故郷にも作れるのではないかと考えています。

**──どんなことを目指していきたいですか**

幼児期から成長に応じた性教育をしている国も多い中、日本ではタブーの意識が強く、子ども達の自己肯定感を低くする要因のひとつになっていると感じています。故郷の学校や教育機関とつながり、性的少数者に対する正しい理解を広げながら、皆が生きやすい栗原を目指せるよう頑張ります。

## ●学校と多様な性

否定されたり強要されることのない環境で、人は自ら育つ力を発揮し、自分らしく成長します。子どもにとって大人は、その権利を理解し、守ってくれる存在。多様な性について正しい知識がなかったり誤解していると、子どもの権利を侵害してしまうことにもなりかねません。

性的マイノリティの割合は血液型のAB型と同じくらいいるとも言われますが、大人もその事実を知らず、存在を否定したりしがちです。当事者が一人で悩みを抱え、問題が深刻になってしまうこともあります。「自殺総合対策大綱」の改定時（2012年）に「教職員の適切な理解を促進することが必要」とされ、性的マイノリティへの無理解や偏見に対処することが盛り込まれました。教科書でも取り上げられるようになってきましたが、残念ながら「学習指導要領」にはいまだ盛り込まれておらず、正しい知識を得られるよう現場での工夫が必要です。また、当事者にも正しい情報が届くよう、家庭や地域での理解を進める必要もあります。



## ●子どもの権利条約

国連で採択され1990年に発効された条約。日本も1994年に批准（ひじゅん。条約を正式に承認すること）し、国は子どもの権利を保障する責務を負うことになりました。

①生きる権利……命を奪われない、病気やけがなどの治療が受けられるなど

②育つ権利……共育を受け、休んだり、遊んだり、自分らしく育つことができる

③守られる権利…虐待（ぎゃくたい）や搾取（さくしゅ。しぼり取ること）などから守られる

④参加する権利…自由に意思を表したり、自由な活動を行ったりできる

子どもに関わる大人は子どもの権利についてよく理解し、ありのままの成長を尊重することが求められています。

## ●カミングアウト

最近では広く使われるようになりましたが、本来は性的指向や性自認など、自身の性のあり方について伝えることを指します。周囲との関係を自分がどのように作っていくかという人生で重要な営みです。**親密な関係**にある人に自分のことをわかっておいてもらいたいというもの、職場や学校など**生活圏**に対応を求めるためのものなど、目的や範囲は様々です。また、**家族**へのカミングアウトはこれら双方の性格を持ちますが、本人にとって特に様々な思いを伴うものとなります。誰に、いつ、どのようにカミングアウトするかは、その人の生き方に沿って**自己決定**していくものです。強制されるものではありませんし、カミングアウトしないという選択もあります。また、本人の意思に基づかず第三者が勝手に行うものはアウティングといわれ、本人が精神的・社会的なダメージを受けることもあり、してはいけないこととされています。

## ●自己決定

どんな生き方をするか、十分な情報を得て周囲から尊重され強制されずに自分のペースで意志決定していくことを意味する言葉です。多様な性のあり方を前提としてともに生きていくためには、それぞれの人が自己決定できる社会的環境が必要です。それは同時に、人々が自分という存在のかけがえのなさを実感できる**「本来感」**をはじめ、周囲の人間関係や社会制度の力をかりながら、自分自信を大事にしていこうとする**「自己肯定感」**や**「自尊感情」**を持てるようになることでもあります。誰もが自分らしい生き方を選択できる社会をつくるためには、それぞれの自己決定を支える環境を整えていくことが大切です。

## ●ダイバーシティ

多様性や相違点という意味がある言葉。本来はそれぞれに違っていてそれでよいはずですが、そのような違いを受け入れにくい社会となっているのが現状です。「ダイバーシティ」について一緒に考えながら、活かしあっていこうという努力を続けたり、ただ見守ったりすることが必要な場合もあります。意識的に違いを受け入れていくことで、知らないうちに他者を傷つけてしまったり、意見を言えなくさせてしまったりすることのない環境を作ることができます。

# お互いが、ありのままに過ごす。同性カップルの暮らし。

同性どうしが夫婦のように人生を共にすることについて考えたことはありますか？ 私たちの社会にはそんなカップルも身近に暮らしていますが、同性の結婚が想定されていない日本では、いざという時に家族として助け合えない状況になる場面もあります。

そんな中で暮らす、あるカップルをたずねてみました。お互いを受け入れながらゆっくりと暮らしを育み、しなやかに生きる姿がそこにありました。

## マンションでの2人暮らし

現在のマンションで18年間、暮らしを共にしているみのるさんとマコトさん。みのるさんはお仕事を引退して10年以上、現役世代のマコトさんは講演活動などをライフワークとされていています。

年の差があるおふたり。26年前、マコトさんがゲイコミュニティに繋がった翌年に出会いました

暮らしの様子を丁寧に説明して下さるのはマコトさん。

「このマンションは私達も含め、高齢化が進んでいて、管理組合で老人会が始まったり、芋煮会をするようになってきています。参加したことはまだありません。」

「だけど、孤立しているようには見られていないと思うよ。特別なことは何もなく暮らしてる。」みのるさんは、マイペースに引退生活を送っているようです。

「お隣が80代のおひとり暮らしで、震災の時はお水を運ぶのをお手伝いしました。その時にふたりで住んでいるんです、ということはお話しました。マンションの管理人さんは彼を“相棒さん”と呼んでいます。日常の中で私達の関係を伝える場面は案外ありません。」

今のところ大きな暮らしづらさはなく、穏やかに過ごされているようです。

## お互いの暮らしをそっと見つめる

震災時、マコトさんはうつが悪化して5年以上が経過していました。

「震災も悪いことばかりじゃないねと思った。この人が落ち込んでいる時に、世の中も皆落ち込んで。運がいいと思う」とみのるさん。転職、講演、イベント…葛藤しながら様々な仕事や活動をし、浮き沈みを経験するマコトさんを“傍観している”といいます。

## ●同性婚、パートナーシップ制度

婚姻関係にないカップルは、周囲の理解不足や制度上の制約などから、日常生活において困難に直面することがあります。行政窓口での理解に濃淡があり安心して相談できるか分からない、病気の時にパートナーを代理人にできない医療機関がある、子どもがいても親権は実子にしか持てない…などカップル同士で支え合うには不安が付きまといます。同性婚ができない日本ですが、全国の自治体にパートナーシップ制度が広がり始めています。多くのカップルが可視化していく中で、隣人の生活として、自分の将来として、多様な暮らしがイメージできるようになるとよいのではと思います。

「私があーだこーだ喋っていると、彼は全く別の話をしたりします。重いことも軽く流してくれることが楽にしてくれます。完全クローゼット※1だった自分がゲイとして行動し始めたばかりの頃に出会い、以来ずっと紆余曲折を見守ってくれています。」

花を育てることがみのるさんの楽しみ。ベランダに常時200ほどの植物が並びます。撮影するのはマコトさん。携帯にアルバムを作ったりSNSで友人に紹介したりします。お互い、自分のことは自分で。食事は暮らし始めて2年目に大きな冷蔵庫を買って以来、自炊中心になりました。

「凝った料理は私が作る。ちゃっちゃと食べる時は彼が作る。私が忙しい時は作ってくれます。」

「自分が食べなきゃいけないから、しゃあないよね。」

（左）みのるさんが手掛ける多彩な植物たち。次から次へと花が咲きます（右）マコトさんが作ったおせち。手のかかる料理も得意です

## 家族に丁寧に伝え、成熟した暮らしを営む

「彼の家族にはカミングアウト※2していませんが、私達の暮らしを当たり前に思ってくれています。説明しづらい関係なので、パートナーシップ制度ができれば分かりやすいかなとは思いますが、今は日常を知っていてもらうことを丁寧にしたいと考えています。」

マコトさんは暮らしはじめて間もなくお姉さんにはご自身がゲイであることとパートナーがいることを伝え、ご両親とお兄さんには10年後にカミングアウトしました。みのるさんのご家族とは、お姉さんと3人でお墓参りや旅行に行ったり、甥っ子が子どもを連れて泊まりに来たりします。家は誰が来ても違和感のない空間になっていると言います。

「皆居やすいんじゃない？ たぶん同士か相棒かくらいにしか思ってない。自分は7人きょうだいの末っ子で“長幼の序”は大切にしたよ。口答えも逆らいもしないで、でもなるべくダメなやつとは言わせないようにしてきた。理解されているわけでも無いけど自由。隠し子?とは聞かれたことがある」とみのるさん。これまでの生き方もご家族との関係作りに役立っているようです。

世代や個性の違いを認め合い、ふたりの暮らしや家族との関係をゆっくり育んできたみのるさんとマコトさんです。

## 終末期に向けてどうしていくか

「パートナーシップ制度がもしできたら乗っかりたいなとは思っていますが、同性婚は制度ができてみないと分からないですね。養子縁組※3もあるよねと話したこともありますが、彼は具体的に考えるのは抵抗があるようです。」

「養子縁組をしてしまうときょうだい、親など家族全体を巻き込む。良いとは思うんだけどね、この人より先に死ぬだろうと思うとためらいがある。」

どうしたら良いだろうねと話題には上がるけど、じゃあ進めましょうかとはならない、と言います。仕事を続けるマコトさんにとって、養子縁組は名字が同じになるので選択したくないという意思もあるようです。

アピールするようなことでもない、とみのるさん。しかし、育んできた暮らしや住まいをマコトさんに残したい思いはもちろんある。自然な形で残す方法があるのならそれが一番。おふたり共通の思いです。

両親、きょうだい、甥や姪など、家族との関係に応じて、日常生活や終末期の暮らしを考える。パートナーとの生活の中で向き合うテーマについて、おふたりのお話を通して考えられることはたくさんあります。

仙台にもにじいろの風が吹き始めています。おふたりの思いが当たり前に実現される世の中になるにはどうしたら良いか。次の世代のためにも、それを皆で考えていくことが必要ですね。

※1 クローゼット／秘密にすること。自分のセクシュアリティ（性のあり方）をオープンにしない時によく用いられる。
※2 カミングアウト／セクシュアリティを表明すること。公にしていなかった自らの出身地や病状を明らかにするときにも使われるようになってきている。
※3 養子縁組／血縁関係に無い子を必要な手続きを踏んで、親子関係に設定すること。成人同士の縁組も可能で、その時には年上が親になりその姓を名乗る。

## 夫婦としてスタートし、婦婦に。思いがけない変化も力に変えて。

“夫が女性として生きることを選択した”ことをきっかけに、柔軟に考え方や役割を変えながら暮らすご夫婦に出会いました。大切な人のありのままを承認し、互いに自分らしく、自立した生活を送ることはどんな形でもできるということを、体現しようとするおふたり。力を出し合ってたくましく暮らしてきたこれまでのお話をうかがいました。

### インターネットで世界が変わったことが転機に

女性として生きることを選択し、戸籍名を改名。男性として勤めていた職場にも意思を伝え、今はありのままの姿で働いているななみさん。成人した２人のお子さんの父親でもあります。

**「女性になりたい気持ちは幼い頃からあったものの、当時は“男は男らしくあれ”という時代。情報もなく、自分の頭がおかしいのだと思っていました。パソコンを買い、自分の気持ちを検索してみると同じ思いの人がたくさんいるという事実を知り、世界が一変しました。輸入代行を利用して女性ホルモンを飲み始め、しばらくしてから妻にカミングアウト(P７参照)。子どもが幼かったこともあり、10年くらいはダボっとした服を着て体の変化を隠していました。女性ものを買うようになったのはここ６年ぐらいの話です。」**

女性として生きるようになり、今の状態が心地良いと感じているというななみさんですが、ここに至るまで妻のゆかりさんとは離婚も提案しながら何度も話し合い、葛藤が続いたと言います。

ご自宅はゆかりさんのご実家の敷地内。緑豊かな環境で暮らしています

### 父の選択に対して、家族の思い

**「見た目も考え方も途中から変わったので、家族の負担は大きかったと思います。迷惑をかけるという思いも強かったですね。」**

いよいよ、女性としてオープンに生きることを決断した時、子ども達は高校生。娘さんは「何となく分かってたよ」、息子さんは「それってもう治らないの？」と話していたそう。息子さんのショックは大きかったのではないか、とななみさんは感じています。ゆかりさんは早くから共に生きることを決断していたようです。

**「一度きりの人生、がまんして欲しくなかった。結婚の時、“人と違う生き方をさせる”と言われましたが、まさかこんなことに、とは思いましたよ。でも、それまでも普通は経験できないようなことを一緒にしてきたので、ありきたりじゃないのも面白いかなと。」**

### 丸ごと引き受け、共に乗り越える

男性として生きなければならないことに悲しみを抱えていたななみさん。いつも苛立ちがあり、怒りっぽかったと言います。女性として生きはじめ“怖さがなくなって、丸くなった”ことで子ども達とのコミュニケーションが深まったそう。“姿が変わっても父親でいて欲しい”という子ども達の願いにも応える形で、ななみさんは父親としての自分、女性であろうとする自分、両方を受け入れてきました。“生きていても面白くなかった”という日々から、父親、母親、主婦（主夫）と柔軟に役割を変えながら、ふたりで子育てや家事、仕事をやりくりする日常に。次第にななみさんは、それまでになかった生きがいを感じるようになっていったようです。

**「自分一人で生きていたら、もっと弱い人間だったかもしれない。」**とななみさんは言います。共に生きようとした家族、形が変わっても父親の責任も果たし続けようと決めたななみさん。互いの決意と信頼が、時間をかけて固まってきたことが伝わります。

### 相手の気持ちも理解して、社会に溶け込む

職場では真摯に仕事に向き合ってきたことが自分の身を助けました。

**「見た目が変わって働き方が変わるとは思わない。俺が全責任を持つ」という社長の言葉に励まされ、社内でも現場でも一層努力を重ね信頼を維持しました。**

**「自信のない姿は誰も受け入れてくれないと学び、３年、５年とコミュニケーションを重ね、自分なりの振舞い方を身につけました。新しい現場でも 10回、20回通うと普通に接してくれる。お菓子持ってけ、ジュース飲んでけって可愛がってもらえるようになりました。」**

女性としてみられることを相手に要求しない。自分自身の心を大切にし、女性らしさが自然に表れるようになれば、相手も自然に接してくれるという事を学んできたそう。生活を守るため、長く働き続けるために、今も社会に溶け込む努力を続けています。

### 法との格闘も経て、選択した今とこれから

法律など様々な壁があり、望みを全て叶えることはできない。多くの葛藤を経て、自己決定(P7参照)してきました。

「こういう夫婦でも人並み以上にやっているところを見せたい」というゆかりさん。「一緒に歩くことを恥ずかしいと思わないでくれる」とななみさん

ある日の食卓メニュー。ななみさんの料理はバリエーション豊富で家族に好評。仲間ともSNSで写真を共有し、交流にも役立っています。「台所に立てることが幸せ」というななみさん。料理は生きがいのひとつとなっているようです。

1 厚切り豚ロースカツ丼　2 キムチとニンニクの芽の玉子綴じ
3 野菜スープ　4 ネギ納豆　5 春菊の胡麻和え　6 白菜の浅漬け

**「ひとりじゃないんで、今の状態が限界かなと思っています。制度が柔軟になることを願ってはいるけれど、それよりも“自分が楽になる方法”を模索しました。情報を収集し、知識を得て、利用できることは利用して、自分が納得できるところまではやった。あとは、暮らし、仕事、遊び、すべてを全力でやるだけです。」**

息子の大学卒業まで、ふたりで頑張ることが目下の目標。休日は花見、旅行、野球観戦など、たくさんの仲間と盛り上がります。選挙にも行く、生活を整える、老後のため貯金もする…。当たり前の暮らしを守り、ささやかな楽しみを続けていければ、誰にも恥ずかしがる必要なんてない。「人の目にはとらわれない」そんな思いで頑張り続けたいという、ななみさんとゆかりさんです。

多くの偏見がある社会の中で、自由に選択し、本当の意味で自分を大切にしたいと思う時、支え合う存在の大きさは計り知れない。力を合わせて暮らしを作り上げていくことで、その人らしさも同時に表現できるようになっていくということを、おふたりの営みやおふたりを支える人たちから学ぶことができます。

家族、地域のあり方から見つめ直しながら、それぞれの生き方を尊重し、ありのままを表現できるまちに近づけていきたいですね。

### ●性同一性障害者特例法　性同一性障害者の性別の取扱いの特例に関する法律

2003(平成15)年に制定された法律で、「定義」の中で「二人以上の医師の診断が一致している」ことを求め、「性別取扱いの変更の審判」第三条には、以下のように記されています。

**① 二十歳以上であること。**
**② 現に婚姻をしていないこと。**
**③ 現に未成年の子がいないこと。**
**④ 生殖腺が無いこと又は生殖腺の機能を永続的に欠く状態であること。**
**⑤ その身体について他の性別に係る身体の性器に係る部分に近似する外観を備えていること。**

③の「未成年の子」は、成立当初は成年を含む「子」とされていましたが、その後の見直しにより改められています。しかし、医療の位置づけが性別違和・性別不合と脱病理化されていることや、国連勧告で手術要件が問題視されていることなどに対する見直しは今後の課題です。②の非婚要件や、性別変更後にしか婚姻できない状況は、婚姻の平等に関する議論にも関連してくる問題です。

## ●にじいろ協働事業が伝えてきた「多様な性」

インタビューでは、皆さんから「自分らしく生きること」についてたくさんお聞きすることができましたが、これは性的マイノリティの方々に限らず誰もが抱える課題です。

男らしさ、女らしさは必要か、性的役割分担意識が根強く残る中でその人の特性が発揮できるかなど、「多様な性のあり方」は一人ひとりの問題として考えることができます。このように、にじいろ協働事業の活動では私達が「あたり前」と感じてきたことを見直す場面がたくさんありました。

せんだいレインボーDayでは、幼児期から壮年期まで網羅し、性教育をはじめとした様々な課題についてボランティアが作成した資料を展示しました

## ●仙台が「にじいろのまち」になるために

私たちは自分の意志で自由に生きる権利がありますが、これまでの社会には「違うことは良くないこと」という常識があり、多様なものに対する無意識の偏見と否定的な考えが生まれがちでした。

「私達はもともと多様であり、一人ひとりに違った思いや意見がある」ということを理解すると、多様な意見やアイディアが生まれ、社会は豊かになり、誰もが心地良く暮らしていけるようになります。「多様な性のあり方」から「多様性」について学び、それを活かすことが「にじいろのまち」に近づく第一歩になると感じることができた2年間でした。

多様なメンバーが集まったにじいろ協働事業のボランティア。否定されない安心安全な場で、一人ひとりが個性を発揮して活躍しました

## ■よりそいホットライン

すべての人を「一人にしない」「社会から切り離さない」ことを目指して、24時間通話無料で電話相談に取り組んでいます。電話ガイダンスに従って、相談内容を選べます。
セクシャルマイノリティ
専門回線もあります。
（4番を選択して下さい）
Tel／0120-279-226

よりそい ホットライン

## ■東北HIVコミュニケーションズ

HIV感染症（エイズ）によって、自らの生命や生き方に影響を受けた人々が共に生きる社会をつくることを目的とし、1993年12月に設立。疾病やセクシュアリティなどに刻まれたスティグマ（汚名、恥辱などの意）を克服し、自らの力を回復して、自己決定して人生を歩むことができるよう、様々な集いの開催や相談活動、人材育成を行っています。
エイズ電話相談／022-766-8699
（第2・4土曜日、18～21時）

## ■みやぎ男女共同参画相談室／LGBT（性的マイノリティ）相談

男女共同参画相談員によるLGBT相談を実施しています。要望により予約面談も受け付けています。
電話相談／022-211-2570
（毎月第2・4火曜日、12～16時。祝・休日を除く）

にじいろ協働事業（2018-2019年度）は「市民協働事業提案制度」によるものです。
多様な性のあり方の理解と課題の可視化について、
多様な協働の場を創出する事業として実施されました。

にじいろキャンバスSENDAI
（東北HIVコミュニケーションズ、性的マイノリティもそうじゃない人も含む市民有志、仙台市で構成）

事務局　〒983-0836 仙台市宮城野区幸町4-7-2
みやぎのいのちと人権リソースセンター内
東北HIVコミュニケーションズ
TEL/FAX 022-298-8532
〔E-MAIL〕office@sendai-nijiiro.org
〔HP〕http://sendai-nijiiro.org

発行　にじいろキャンバスSENDAI
発行日　2020年3月30日
デザイン・編集　トト.ライティング
発行部数　5000部
配布場所　市内公共施設や行政窓口、市内一部店舗
市内外の男女共同参画センター



※「LGBTってたとえばどんな人のことなの?」は裏表紙からお読み下さい。

にじいろキャンバス SENDAI
②
LGBTの人たちのことはすこしわかったけど…
わたしのまわりにはそういう人はいないよ
ボクのまわりにもいないなー
LGBTって特別な人のことなの？
日本では「LGBT」は「性的マイノリティ」という呼び方もしていて
「マイノリティ」っていうのは「社会のなかで少ない人たち」っていう意味なんだよ
「セクシュアルマイノリティ」ともいうよ
だけど日本のLGBTは5～10%いるといわれていて
この割合は左ききの人や血液型がAB型の人とおなじなんだ
えっそんなにおおいの!?
ぜんぜん少なくない…!!
AB
左
5～10%というと…
40人クラスだったら2人から4人いるってこと？
「いない」とかんじてたのはおもいこみだったんだね…
だから「特別な人」じゃないし
じつはこのジェンダーの※問題はみんなにあてはまることなんだ！
わたしたちボクたちにも…？
それをわかりやすく考える方法のひとつが
「SOGI」です
またしらないことばがでてきたーっ
ちょっとむずかしいかもしれないけれど…つぎのパネルでじぶんにあてはめて考えてみよう！
※ジェンダーって？……「男性」「女性」だけではなく、いろんな性別のこと。
© 井上きみどり

にじいろキャンバス SENDAI
③
SOGIって…なに？
Sexual Orientation and Gender Identity …の頭文字をとって SOGI
すべての人にあてはまるセクシュアリティの考えかただよ
LGBTという分け方だと「LGBTの人」（当事者）と
「そうではない人」に分けられてしまって
当事者
当事者じゃない人
LGBTは特別な人
わたしは当事者じゃないから関係ない
…という誤解が生まれやすいんだ
SOGIで考えると
それがみんなの問題になるんだよ
SOGIは①②のくみあわせで考えられていて
① こころの性
② 好きになる人の性
③ 社会的な性（言葉づかいや服装など）
④ からだの性
①②③④で考えられているSOGIESCもあるよ
人によって度合いがちがいます
①からだの性別
男 女
男ども女どもない
わたしはこのあたり
②こころの性別
男 女
ボクはここ
わたしはちょっとぼいかな
男性っぽいかな
③好きになる人の性別
男 女
だれも好きにならない
たとえばトランスジェンダーのこの人は
女性として生まれて男性の心を持っていて
好きになる人は女性
じゃあたとえばあなたは？
女性として生まれて
少し男っぽい性格だけど女性の心の方が多くて
好きになるのは男性
ホントだ！みんなにあてはまるね！
セクシュアリティって特別な人の問題だとおもっていたけどすべての人にかかわることなんだね～
みんなもSOGIで自分の性がどうなっているのか、考えてみてね。
© 井上きみどり